



同社の前身となる日本建築積算研究所は1964年、生島会長の父・生島道春氏により、龍建設工業（大阪市）本社事務所の一画で創業。大林組見積部在籍時、仕事の関係で知り合い、意気投合した龍建設工業先代社長の近藤春男氏が「無料で間借りさせてくれた」。世代交代した今でも「足を向けて寝られない」といふ、生島会長は父が受

これまで一貫して、積算数量や建築コストの算出を手掛けてきた日積サーベイが2024年10月、創業60周年を迎えた。積算分野で培ってきたノウハウを生かし、BIM対応建築積算システム『HEAIOO（ヘリオス）』の展開や、ファシリティ・マネジメント（FM）にも取り組むなど、時代の変化を適切に捉え、『やってみよう精神』で進化を続けている。生島宣幸会長に60年を振り返ってもうひとつともに、展望を聞いた。

## トップに聞く

# 積算ノウハウで挑戦

けた当時の恩を大切にしている。

こうした人間関係を大切にする姿勢は、生島会長が掲げる社は『正確・誠実・先進』

の「誠実」に見て取れる。「設計者や施主の皆さんの気持ちに思いを巡らせながら仕事する」意識を持つことで、顧客との関係性が強固になっていった。

その生島会長は30代の時、延べ約30万平方メートルの関西国際空港の積算を担当。これが契機となり、会社の業務内容が「コスト算出まで担当するよ

思えばこの変化は当社にとって良かった。コストまで扱うことで責任の範囲が広がり、やりがいが大きくなった」と回顧する。

その後、日積工務への改称を経て、92年、現在の日積サーベイに社名変更した。

先代から代表権を引き継いで25年が経過し、この間「売上比率が変わってきた」と話す。10年前に、積算とヘリオスをはじめとするソフト開発の比率が7対3だった一方

で、現在はFMにも取り組み、積算、ソフト開発、FMの比率が5対4対1と、積算を核に、進化を続けている。

10年前に立ち上げたFM部門では、建物修繕や発注履歴などを管理できる総合情報管理システムを提供し、現在、広島市や福岡市など全国12の自治体で採用されている。

2024年2月には東京都墨田区の場合が第18回日本フ

アシリティマネジメント大賞（JFMA賞）の優秀FM賞に選ばれるなど、成長著しい。発注履歴管理をはじめ、積算のノウハウを生かせる部分も多く、長期的に見て「FM分野の比率をもっと増やしていきたい」と意気込む。

好評を得ているヘリオスの開発には「積算経験者も携わっており、部門融合で好循環が生まれている。積算の発想はソフト開発にとどまらず、FMにも生きる」とし、部門

横断的な取り組みの強化に思いを新たにしている。

時代の変化を捉えながら、「やってみよう精神」で、現在、ヘリオスとCO<sub>2</sub>排出量算定システムとの連携に挑戦中だ。今後、ヘリオスが「CO<sub>2</sub>算出やFMを一連の業務として横断的に扱える画期的なシステムになっていくように、挑戦を続けていきたい」と前を向く。

